

下宿生活と青春

昭和39年、ガキ大将として名を馳せた小学校を卒業すると、5キロ先の小学校からさらに2キロ先の中学校に進学した。加茂町・阿波村組合立矢筈中学校という。組合立中学校。都会の人には耳慣れないと思うが、中・小規模の自治体が、一つの自治体では荷が重い行政サービスの一部を共同で

私の歩んだ道

小林 元浩

②

行う一部事務組合を設置し、その組合が運営する中学校ということだ。

小学校の時は大いに野山を駆け回った私は、中学校に上がると、読書に耽るようになった。偉人伝を好み、学校の図書室にあった伝記は、野口英世、北里柴三郎からエジソン、ファールブル、リンカーンまで、とにかく棚の端から端まで読破した。津山が世界の全てだった自分にとって、本を通じて

世界が無限に広がっていくのが面白かったのだと思う。将来は農業化学者になろうか、医者になろうかと夢を広げていった（この時点で弁護士は選択肢に入っていないかった）。

時は、昭和39年、東京オリンピックの年である。我が家でも、



高校3年の春、下宿仲間と(昭和45年5月)
前列左端/貝阿彌誠君(元東京地方裁判所長)
中列左側/太田昇君(現真庭市長)
中列中央/小林
後列左端2人/植月さんと佐和子さん

購入したばかりのカラーテレビを父・母・兄と囲み、熱戦に胸を躍らせた。特に印象深かったのは、東洋の魔女と言われた女子バレーボール。宿敵ソ連との全勝同士の対決で見事金メダルを獲得した。日本が世界と肩を並べて活躍する姿に、戦後の日本の経済成長と重ね合わせて誇ら

しく思ったものだ。

早熟な私は、この頃、初恋も経験した。相手は、成績優秀で明朗闊達な同級生。森鷗外の中タ・セクスアリスの主人公と自分を重ね合わせては、恋とはこういうものかと胸を焦がした記憶がある。自分の気持ちすら告げることが出来ないままに中学を卒業。初恋は儚い思い出である。

* * *

昭和42年、岡山県立津山高校に進学。当時より津山高校は岡山県の県北一の進学校であった。自分で言うのも何だが、田舎の中学校ではずば抜けた成績だったが、上には上がいるものだ実感させられることになる。それでもいかと開き直る鷹揚な性格は今にも通ずるかもしれない。

入学当初の2か月は自宅からの通学で、朝5時前に起きて6時過ぎの一番列車に乗り、1時間余りかけて津山駅に着き、20分徒歩で高校に通うという生活だった。毎日片道2時間半の通学ではとても

学校の勉強など出来ず、やむなく下宿をすることになった。高校2年になると、同級生であった太田昇君（元京都府副知事・現真庭市長）から声を掛けられ、彼が下宿していた津高（津山高校生徒は愛着をもって母校をこう呼ぶ）の北にある頼経アパートに移ることになった。このアパートには小学校の先生を勤めておられた植月ご夫婦とその家族が管理人として住まわられていて、お嬢様で津高生の佐和子さんや太田君はじめ津高の同級生7人が共同生活を送ることになった。夕食は植月夫人の料理を皆で集まって頂くいわゆる賄い付き下宿屋で、勉強に疲れると台所に集まって夜食を作り、夜半まで議論した。当時学生運動が最盛期にあり、多感な私たちも触発され、新聞雑誌は勿論、小説、哲学書も読んでいた。1年余りだが、この時大いに議論をし、本を乱読したことが私の人生の方向を大きく左右したように思う。